ＣＨＯＳＨＩ（第８話）

藤本は疲労困憊で、銚子一中と戦うことになった。銚子一中の打順は一番　関根、二番　小和知、三番　芝野、四番　藤原……の強力打線。監督は後に、銚子商業を率いて昭和４９年に全国優勝をした斉藤監督だった。最強ともいえる銚子一中に延長１９回を投げきった直後の藤本は真っ向から立ち向かった。

球場にいる誰もが、藤本はいずれ銚子一中につかまると思っていた。しかし、藤本は強打者でも、当てるのが精一杯のスピードと切れのあるボールを投げた。スコアボードに０が並び、延長９回までゲームは進んだ。外は暗くなり始めていた。

銚子一中の斉藤監督が審判と話し始めた。藤本は今日一日だけで２８イニング投げている。１イニング１５球投げるとすれば、４００球以上投げている計算になる。そして審判が、ホームベースに並んで、日没サスペンデッドゲームを宣告した。まだボールは見られる状態だったが、藤本投手の肩の疲労を気遣った、敵将斉藤監督の配慮だった。

翌日の再試合は銚子一中が２対０で勝ち優勝。しかし秋の大会では銚子四中が雪辱を果たし、初優勝を成し遂げた。銚子四中は東総大会に出場したが、エース岡本、４番でキャッチャー海上を軸とする飯岡中に１点差で敗れた。

中学野球の試合が全て終わり、藤本は家からも近く、前年、甲子園夏の大会に出場した銚子商業に進学することにした。そして銚子商業に合格し、チームメイトだった中居、下田、小林と一緒に野球部の初練習に行くと、そこには銚子一中の関根、藤原、芝野、小知和、東総大会で負けた飯岡中の岡本と海上を含め約８０名の一年生の猛者達がいた。

そして厳しい練習が始まった。４月１０日、皇太子殿下の結婚式の日、全体練習は休みだったが、一年生が先輩に呼び出された。『今日は、一日走ってもらう。まず、学校から犬吠埼の先までランニング、その後暗くなるまで、坂ダッシュだ。』一年生は真っ青な顔していると、先輩は藤本の所に寄ってきた。『藤本、お前は学校に残って別メニューだ。』そして一年生がいなくなると先輩はこう言った。『藤本、お前はここで少し走って、みんなが帰ってくる前に終わりにしていいぞ。お前に怪我をされてしまっては、監督に死ぬほど怒られる。だからお前はランニングをしたふりをして帰っていいぞ。』藤本は野球以外の練習はあまり好きではなかったので、『助かった。』と思って、少し走って暗くなる前に家に帰った。